

ことばを学ぶ メカニズム

認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

第7回

辞書に書いていない可算・不可算の理屈 —— furniture はなぜ不可算名詞なのか

先月号では、英語の可算・不可算文法の習得がなぜ難しいのかという問題をとりあげた。たしかに私たちの感覚からすると、英語における名詞の可算・不可算は納得がいかない、あるいは適当に決められているのではないかと思うケースが多々ある。しかし、ほとんどの場合、英語なりの理屈がある。その理屈は、辞書や文法書には書かれていない。今回はこの理屈について掘り下げて考察していこう。

❁ beans と rice

可算名詞として「数えられる」カテゴリーに入れるべきか、不可算名詞として「数えられない」カテゴリーに入れるべきか、すぐには判断しにくい名詞は少なくない。たとえば“bean”と“rice”と“oats”と“wheat”はそれぞれとても似ていて、同類のように思えるが、“bean”と“oats”は可算、“rice”と“wheat”は不可算名詞である。

さらに、これらの名詞は文脈によって可算・不可算が変わることがある。辞書によっては[U, C]などと表記しているものもあり、どちらでも使われる、と受け取られるという印象をもってしまふ。筆者も、先月号で、“potato”や“egg”は可算名詞、“cauliflower”は不可算名詞、と書いたところ、本誌の編集部から、辞書の記述によればこれらの名詞は可算、不可算どちらもあるのでは、と指摘を受けた。しかし、実際には、英語母語話者は、辞書に両方の使い方が書いてあるからといって、「どちらでもよい」とは考えないのである。もともと不可算のものを可算に、あるいはその逆にはあるが、そのときもきちんと

した理屈に基づいている。今回は、アイテムがすべて数えられるものなのに、それをまとめたカテゴリーが不可算名詞であるという現象を取り上げ、なぜこれらの名詞が不可算名詞なのかという問題を考えたい。

❁ “furniture” はなぜ不可算名詞なのか

“furniture”のように、その構成員に「イス」など、より基礎的な名前をもつカテゴリーを含む包括的なカテゴリーを指す名詞を心理学では「上位概念カテゴリー」と呼ぶ。例えば“animal”, “insect”, “reptile”, “vehicle”, “tool”, “weapon”, “jewelry”, “food”, “sports gear”, “livestock”, “hardware”などはみな上位概念カテゴリーである。ところで読者のみなさんはこれらの名詞が可算名詞か、不可算名詞かご存じだろうか。

正解を言うと“animal”から“weapon”までが可算名詞、“jewelry”以下が不可算名詞だ。構成員はすべて数えられるにもかかわらず、なぜ“furniture”などは、不可算名詞として「数えられない」とされ、日本語では「この客は家具3点を買っていった」と言うのに“*That customer purchased three furnitures*”は誤りで、“*That customer purchased three pieces of furniture.*”と言わなければならないのだろうか。

実は長い間、この問題は個別言語の変化、進化の過程で偶然にそのようになった所産で、深い理由はないと考えられていた。しかし、ほんとうにそうだろうか？

❁ 概念カテゴリーの階層構造

一般に、概念カテゴリーは「似たものの集まり」と考えられる。構成員同士は多くの特徴を共有し、その共通部分がカテゴリーの核となっている。したがって、上位カテゴリーを構成するメンバーはその特徴を共有するし、そのカテゴリーが包含する下位のカテゴリーのメンバーは上位カテゴリーの特徴を引き継ぐ。例えば、ネコやゾウ、ウマなど様々な哺乳動物が共有する特徴（心臓を持つ、呼吸をする、受精卵は胎内で成長して産まれてくるなど）はそのメンバーの1つである「イヌ」に引き継がれ、さらに、イヌの性質（人間に従順、嗅覚が鋭いなど）は「イヌ」というカテゴリーの構成メンバーであるプードルの性質として引き継がれる。このような「似ているモノ」たちが階層的にまとめられて、上位のカテゴリーのもつ特徴が下位のカテゴリーのメンバーに引き継がれていくのは生き物に限ったことではない。

しかし“furniture”を考えてみると、カテゴリーメンバーであるイス、ベッド、タンス、机などは、共通の機能や属性がなかなか思い浮かばない。上位概念カテゴリーの名前で、不可算名詞で表されるものには、○○ gear, ○○ ware, ○○ equipment というようなものが多い。日本語に置き換えるなら「○○用品」というもので、これらのカテゴリーはホームセンターやデパートなどの売り場名として見かけることが多い。構成メンバーが互いに共通の特徴を持っているからまとめられているのではなく、台所で使われる、キャンプに使われるというように、あるシーンや活動に使われるものが集められているカテゴリーだ。“furniture”は室内というシーンをつくる。そこにおいては、同じアイテムがたくさん集まるのではなく、異なる様々なアイテムがその場に集い、1つのシーンをつくるのが大事なのである。

❁ 英語母語話者の可算・不可算の分け方

私が以前行った実験研究で、文の自然さを判断させたら、英語母語話者は“A poodle is an (kind of) animal.” “A motorcycle is a (kind of) vehicle.” という文は自然だが、“A deodorant is (a kind of) camping gear.” や “A sofa is (a kind

of) furniture.” のように、1つだけのメンバーで、“X is Y” という言い方はあまり自然ではないと判断した。しかし“*Tent, sleeping bag, and deodorant are camping gear.*” のように異なる種類のメンバーを集めると自然さの度合いが向上した。他の実験からも、可算名詞の上位カテゴリーではメンバーとカテゴリーの間の直接の結びつきが強いのに対し、不可算名詞カテゴリーでは、個々のメンバーとカテゴリーの間の結びつきは弱く、異なる種類のメンバーが集まって初めてカテゴリーとして意味を成す（目的を果たす）ことが示唆されている。

英語では、メンバーは動物であるにもかかわらず“livestock” “cattle” のように不可算名詞のカテゴリー名がある。“tool” と “hardware” のように、カテゴリーメンバーが重複するのに、一方は可算、他方は不可算というペアもある。これらは言語の現象が必ずしも論理的に一貫せず、慣習によってつくられる例として以前は考えられていた。しかし、実は、母語話者の心の中では理屈が存在するようだ。“livestock” ということばを使う時は、個別のウシやブタのことを考えているのではなく、家畜の集合という観点からそれらの家畜を見ている。“tool” という語を使う時は個別のモノの機能性に注目しているが、“hardware” という語を使う時は様々な種類の工具が一堂に集まるシーンを心に浮かべている。英語の可算性、不可算性は、必ずしも個別のモノが個体として数える単位となっているか、数える単位を持たないということのみで決まるわけではない。母語話者は、ある特定の観方を世界にかぶせ、その表れとして可算、不可算を使い分けているのである。英語母語話者は、学校でこの理屈を教わることはないが、感覚的にこの理屈を知っている。もともとの可算、不可算を規範から外れて使うのも、この感覚的な理屈によって意図的に行っているのである。

(慶應義塾大学教授)

◆参考文献

Wisniewski, E., Imai, M & Casey, L. (1996). On the equivalence of superordinate concepts. *Cognition*, 60, 269-298.